

遺品整理の現場から ～最期まで孤立しないために～

最期まで好きな物に囲まれていたい。遺品はどうしたらいいのか。遺品整理会社キーパーズ(有)の社長吉田太一さんのメッセージは、人として生きて、人間らしく死ぬことの大切さでした。



吉田太一さん

キーパーズでは年間で1,500～1,600件の遺品整理の依頼があり、その内200～300件は、部屋の中でひとり亡くなっていた「孤立死」です。男性が圧倒的に多く、全体の7～8割を占めます。

死後1週間～経つと、特に夏場は大変なことになり周囲の人にも辛い思いをさせることとなります。

「こうなってはいけないよ」と、遺品たちが語りかけてきたことを、みなさんに伝え、孤立して「人に気づいてもらえない死」を迎えないようにして欲しいというのが私の思いです。そのためにも、自分を見かけないことを気にしてくれる人をつくるのが重要です。

また、毎日を充実させるために、自分の中であと何年生きるかを決め、3分の2のお金は残りの人生で全部使い、3分の1は、間違っ生きて残ったときのために取っておく。3分の2のお金を使って、3つ以上予定をつくるのがポイントです。目標が複数だと早めにはじめようとなるからです。

お金の使い方は、今年、来年…と、使う金額を決め、必ず使い切ります。目標を達成した後に、そこで見聞きしたことを人と話すことで、お互いに刺激になるし、充実した時間を過ごし、皆さんの貯金を使ったら、経済的にも、ものすごくいい社会貢献になるのでお勧めです。



会場は満員

参加者からの感想

限りを知り、今を生きよう

横浜 小島真紀子

先日、引っ越しをしたときに、こんなにもいないものがあったとはと驚きました。私にとっては価値があるものも、遺品になったら「いないもの」になります。

仕事柄、孤立死の社会的現実を近くで感じてきたこともあり、遺品整理の現場を見てきた講師がどんなふうに話されるのかに興味があり、参加しました。前半に、吉田さんが監督をしてつくられた、孤立死をした男性のアニメーションが放映されました。孤立死とは誰もが、いつ起こるか分からない、普段の生活の中で紙一重で起こることだなと感じています。

一番印象的だったのは、「何歳まで生きるかを決め、自分のやりたいことを決めて、

持っているお金の3分の2は残りの人生のために使い、3分の1は万一長生きをしたときのために取っておく。」というお話でした。やりたいことの優先順位を付けて叶えていく。優先順位がついたら、それに合わせて住むところも決まりますし、自分にとって必要なものも決まっていきます。終わりを意識して、介護が必要な時期や、終末期など、それぞれの段階に応じて、それに合う住まい方やいるものを決めていけるのかもしれない。それに、自分のやることを決めて動く、人ともかかわるし、自分のやりたいことを周りの人にも伝えることになりコミュニケーションにもなります。そうして自分の周りを結果として整理されていくことにつながるのではないかと、明るい気持ちになりました。